

何に頼って生きるのか

——宗教改革の精神が現代に語り掛けること

江藤直純

一 立ち止まって足もとを見直す

何事にも始まりがあります。それは、今のそしてこれからの在り方・生き方の出発点、あるいは原点です。人の生涯についても然り、大学にとつてもまた然りです。今日私たちは私たちの大学、聖学院大学の創立を記念して、その出発点、原点にあつたものに思いを馳せ、ここでこれから生きていく上でのぜひと必要な「ヴィジョン」と「ミッション」を今一度明らかにし、それを生きていくための「ミッション」を改めて奮い立たせたいと思います。

二 RJJR

さて、二二世紀を生きる私たちですが、近代を産み出した出来事に思いを馳せてみましょう。

皆さんは、二つのRと聞いて何を思い浮かべますか。一つはRenaissanceルネサンスです。再び生まれること、

再生、新生。世界史では戦前から文芸復興と訳されてきましたが、現在はもっぱらカタカナでルネサンスです。一四世紀後半からイタリアを中心に花開いた美術を中心とする文化です。ギリシャ・ローマ文化、ひっくり返してヘレニズム文化の精神を受け継ぎ、明るくおおらかに人間の美しさ、素晴らしさを賛美し、その可能性を信じ、ヒューマニズムとそれがもたらす真善美を高らかに謳い上げました。今日まで脈々と続き発展してきた人間中心主義の文化です。

もう一つのR、それはReformation、一六世紀以来のキリスト教界内で起こり、世界史的な大きな影響を及ぼした精神運動のことです。明治以来宗教改革と訳されてきてすっかり定着していますが、本来の意味は「再formation」形成、再形成とでも言ったらいいでしょうか。発祥の地はドイツ。しかし、北欧のみならず、様々な形と強調点の違いを伴いながら、スイスやフランス、イギリスにもオランダにも波及し、カトリック教会の中でも新しいうねりを起こしました。教会の在り方への自己批判や改革の動きはそれ以前からもありましたが、この宗教改革と呼ばれる運動では、徹底した人間の罪の自覚と神による救いが強調されました。ルネサンスとは違い、こちらは聖書とヘブライズムの伝統によって立ちました。人間中心ではなく、徹底して神中心の信仰と神学、人間観と世界観が語られました。

このように正反対の性格を帯びていますが、一つだけ共通するものがありました。実はそのスローガンは、ad fontes (アド・フォンテス)「源泉に帰れ」です。ルネサンスの源泉はヘレニズム文明。Reformationでは聖書に帰ることを志向したのです。でもそれは後ろ向きということではなく、前に進むために原点、源泉を明らかにし、それにしっかりと立つことが強く意識されたのです。

三 自立・自律・自由・自力

五〇〇年ないしそれ以上前のルネサンスや宗教改革に続く近代には、現代を生きる私たちにとって基本的に大事なものが現れています。それを四つの「自」のつく熟語で言い表すと、自立、自律、自由、自力です。

ヨーロッパだけでなく日本でも言えることですが、中世あるいはそれ以前の古代では、個々人の自立ということとは重んじられていませんでした。自立ではなく、むしろ依存することが当然でした。自分よりも上の権威と権力に依存するのです。親であつたり主人であつたり伝統であつたり組織への依存です。それが美德でしたし社会構造がそうなっていました。内面的に言えば、ここでは自律は尊ばれず、外なる権威・権力による他律が支配していました。ということとは、自由ではなく、制約、束縛、抑圧、支配、総じて不自由が世界を覆っていました。大多数の間はそういう環境の中で生きていました。社会はそれを良しとしていました。

そういう中世に異議を申し立て、それを突破した人間として挙げられてきたのがマルティン・ルターでした。

中世ヨーロッパには二つの権威と権力の頂点が聳えていました。精神界を支配する教会という権威、その最高の霊的権威がローマ教皇でした。また、数多の領邦君主や王侯を束ねる神聖ローマ帝国を統べ治めるのが皇帝、こちらは世俗界の最高権力者。その両者から迫られても「我、ここに立つ」と宣言して信じるところを一步も譲らず、さらには破門状を公衆の面前で焼き捨てて信念を曲げず、帝国によって命の保証を奪われても少しも怯まなかつた一人の人間。まさに、自立と自律、自由を生き抜き、何ものにも屈しない強靱な個人です。近代精神そのものと言つて良いでしょう。

だからこそ、宗教改革の出来事と共に世界史に名を残し、宗教家として世界の偉人の一人に数えられ、高校の教科書にも必ず取り上げられています。おそらくこの日本においてイエス・キリストを除けば、最もよく知られているキリスト者でしょう。

四 人々の前pro coram hominibus、あゝは神の前pro coram Deo

しかしながら、ルターという人の真骨頂はいわゆる近代的人間像の先駆けというところにはない、と私は敢えて申し上げたいのです。もしもルターが人間の自由、自立、自律を謳い上げたヒューマニストだったなら、彼は当然ルネサンスの群像の中に位置づけられることになります。しかし、ルネサンスを代表する芸術家たちとも思想家たちとも、ルターは真逆の方向を向いていたのです。彼らが理想とした価値観、人間観とルターのそれとは正反対だったのです。『キリスト者の自由』という書物も著したルターなのに、どこが違うのでしょうか。

ルターの父親は一介の農民から刻苦勉強して銅山の所有者また市の有力者となった人でした。上昇志向を絵に描いたような人物です。ですから、長男マルティンへの期待は大きく、高い教育を授けようと五歳からラテン語学校に通わせ、大学は当時名門中の名門エルフルト大学に進ませます。マルティンは先ず教養学部で修士まで終え、それから法学部へ進みます。このままエリートコースを突き進めばやがては宮廷顧問か市長か。人間的に言えば、「人間の目の前では」coram hominibus（コーラム・ホミニブス）まさに勝ち組です。彼は自由で、自立的で自律的な人間として、高い評価を得たことでしょう。

しかし、ルターはそういう生き方をしませんでした。落雷に遭遇し、彼自身予想もしていなかった道に変わりま

した。彼は立身出世を約束された道から正反対の、修道士としての人生を歩むようになりました。もちろん、大転換の背景には、当時の人口の三分の一を死なせたペストの大流行も、友人の死も、自身の大怪我などもあり、死と向き合いながら人生をいかに生きるべきかを考えていたでしょう。この事件をきっかけに、自分の命を深く見つめるようになったのです。しかも、命を、自分自身を神の前で見つめるようになったのです。死を考えることはとりもなおさず生を考えることでした。

ルターという人は、他の人々との比較で見ると、成績も良く、能力も高く、間違いなく輝かしい将来が待っていました。修道院に入ってから、その勉学も修業も他の人に抜きん出ていました。けれども、修道士マルティンはどこまで精進してもその成果に満足することはできませんでした。いえ、満足できないどころか、かえって不安と恐れが増すばかりでした。

なぜでしょう。それは、自分の精進の成果を他の人と比べるのではなくて、絶対的に聖で絶対的に義である「神の前で、神の目の前で」coram Deo（コーラム・デオ）自分を見つめたからです。そこで露わになるのは、どこまでも自己中心的な、自己の本性でした。小さな黒い染みは黒っぽい灰色の背景の前では目立ちません。黒の背景ならば見えません。しかし、純白の紙の前ではどんなに小さな染みでも見逃されるはずはありません。

ルターは他と比べて優秀だとかそんなこととは関係なく、神の前での自己の罪深さを知ったのです。とどのつまりは自己中心的な自分。人を愛するときは、善行をするときは、結局は自分の喜びのため、自分の救いのため。少しでもうまくいけば、そこには高慢が頭をもたげてきます。自己満足、自己追求、他者を利用してでも実現したい欲望。最も宗教的な場面でさえ、神を求めているようなときでさえ、自分本位な思いが底にある。それが聖書が言う「罪」だと知ったのです。刑法や民法に触れるかどうかではないのです。絶対的な聖と義の神様、まったく愛と

純真さの神様との関係においては、自分の存在が罪ではないとどうしても言い張れないのです。

それだけではありません。神の前で胸を張って自分こそは正しい存在だ、受け容れられるべきだと言えないだけでなく、自分自身の力で、自分の努力で、そのような神に認められる正しい存在にはなれないことを思い知らされて、ルターは絶望に陥ったのです。

五 救いは私の外から extra nos

自分には神の前での自分の問題を解決する能力があるならば、自力で解決すればいい。しかし、それが不可能だと分かったら……。自己救済の可能性がないと分かったら……。そのときには絶望に陥る、虚無に打ちひしがれるしかない。順境にあるときはいい。しかし、ひとたび自分の罪、悪、死の恐ろしさと直面せざるを得なくなったら、どうするか。どうしようもない。それが人間中心の結末なのです。

ルターがそうでした。聖書を読めば読むほど、絶対的に聖で絶対的に義である神を知らされ、その神によって裁かれるしかない絶望に追いやられていたのに、そこから救い出したのは、なんと、その聖書でした。聖書を通して神からの救いのメッセージを聴いたのです。

「神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が独りも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネによる福音書三章一六節)

「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通し

て、神の恵みにより無償で義とされるのです」(ローマの信徒への手紙三章二三―二四節)

ルターの発見、否、再発見は「救いは外から」です。自力による救済は不可能と知ったとき、神の恵みによりイエス・キリストの十字架による贖いによつて救いに値しない自分が救われると聖書の言葉を通して確信できたのです。救いの根拠は私たちの外にあるのです。階段を下から一段一段昇つていくことで神に近づくことができないなら、どうしたらいいのか。そうです。神の方から階段を降りてきていただくしかないのです。

宗教改革のスローガンとして「恵みのみ sola gratia」「信仰のみ sola fide」「聖書のみ sola scriptura」とよく言いますが、自分の力ではなく神の恵みによつて、キリストを通して与えられるその恵みを感謝して受け取る信仰を通して、そのことを証している聖書によつて、私たちは救いに入れられるのです。

六 Doing is not Being

現代ではなく五〇〇年前の、日本ではなくドイツ。中世末期のヨーロッパと二一世紀の日本にどんな共通点があるでしょうか。ルターの話が今を生きている私たちに一体何の意味があるのでしょうか。周囲を見回しても、誰も神の裁きや死後の命に関心を持っていないようには見えません。習慣としての宗教は存在していますが、神や救いは深刻な生き死にの問題ではなさそうです。では、宗教改革は私たちに無縁でしょうか。

日本のみならず現代世界は新自由主義やグローバルエコノミーの嵐が吹きまくり、人間は誰もが競争原理が支配する社会の真つ只中で、成果主義とか結果主義あるいは生産性という過酷な物差しで評価され、二極化されていき

ます。極端に言うると、生きていくのに値する者と、生きていくのに値しない者とに選別されているようです。成果、結果、能力というものが人間の価値評価の基準になっているようです。人間の中にある尺度で、人間の命が仕分けされています。そこに救いはありません。

人間をその *Doing*、何ができるか、どうできるか、その出来映えはどうかで比較する―それが人間の評価の尺度である限り、ある少数の人々は存在が認められ、救われても、それ以外の多くの人々は呻き、苦しみ、救われません。それが私たちの生きている社会なのです。

このような社会に *Doing* とは全く違う基準、尺度、価値観はないものでしょうか。あります。それが *Being* です。存在そのものが、たとえ出来が良くても悪くても、ある種的能力が優れていても劣っている、成果や結果の評価が高くても低くても、それとは全く無関係に、存在そのものが無条件で受け容れられ、全面的に肯定される価値観です。これは人間に内在する物差しではありません。それを持ち出せば必ず選別が起こります。だから、この価値観は人間社会の価値評価のやり方ではありません。人間的な観点からすれば、不平等に見え、不合理だと言われるでしょう。理屈に合わないと言われ、非難されるでしょう。けれども、愛の観点からすれば、納得がいきます。いえ、正確に言えば、愛は愛でも、相手の価値によって生じる愛、その価値が私にどれほどの快、快感、快樂を与えるかということを決まる人間的な愛ではありません。相手の価値に左右されない純粹な愛、無償の愛、神の愛、アガペーの愛なのです。愛されるからこそその人はかけがえのない価値があるものとされるのです。

Doing によらず *Being* そのものが認められ、受け容れられ、愛される。ただ恵みのみ―それこそが真の救いです。それがルターによる福音の再発見です。宗教改革の根本原理は二一世紀の日本社会でこそ最も必要とされているものではないでしょうか。

七 人に仕える神

今日私たちが記念している聖学院の建学の精神は「神を仰ぎ人に仕う」と言われてきました。人を愛する、人に奉仕することは言うまでもなく尊いことです。しかし、それが真の意味で可能になるのは、神を仰ぐときです。

しかも、その神は天の高みから苦悩する人間を冷たく見下ろし、基準に叶わない者はバツサリ断罪するような神ではありません。罪に苦しみ、弱さを嘆く人間をあたたかく無条件で受け容れ、その罪を皆引き受け、赦し、その存在を全面的に肯定する十字架の神です。神を仰ぐと言いますが、私たちが仰ぐ神はそのような十字架の神なのです。

自分が愛された者だけが他者を愛することができます。自分が赦された者だけが他者を赦すことができます。自分が仕えられた者だけが他者に仕えることができます。自分が生かされた者だけが他者を生かすことができます。愛し、赦し、受け容れ、生かしてくださる神、つまり仕えてくださる神があつてこそ、私たちの人を愛し、赦し、受け容れ、生かす生き方、つまり仕える生き方が可能になります。

私が勤めるルーテル学院大学の大芝生の真ん中に立っているモニュメントにはルターの紋章と共に彼の言葉がドイツ語と日本語で刻まれています。彼がかつて語り、今も私たちに語り掛けている言葉です。「自分のためではなく隣人のために生きて仕える生に神の祝福があるように」。創立記念日を祝う皆さんにこの言葉を贈ります。

「自分のためではなく隣人のために生きて仕える生に神の祝福があるように」。